

面は「一ヶ所しかない」とは私の敬愛する丸谷才一の言葉です。彼にかかれはあのニュートンですら名場面はリングの落ちるところだけです。名場面の一つ所もあつたのかどうか定かではない私の人生の転換点をお話するのも面映いことですが、違っていることから、今回寄稿の機会を頂けたのではないかと思います。

私の人生の転換点は、アメリカで研究者として生きていこうと決めたときです。それまでは、学位取得後は留学し、その後帰って日本で研究を続け、いずれどこかの教授になると漠然と考えていました。1988年春、4年の米国NIH留学の後、京都大学に助手として赴任しました。ところが仕事を始めて間もなく、日本での生活がどうにも窮屈であると思うようになりました。NIHでの最後の1年は半ば独

信州松本より

信州大学大学院医学系研究科 教授

新藤隆行先生 (平3卒)

平成3年卒の新藤です。平成16年より、信州大学にて「臓器発生制御医学講座」を担当させて

予定です。私は、東大在籍中、第3内科そして循環器内科にて、矢崎義雄教授(昭38卒)、永井良三教授(昭49卒)のご指導の下、さまざまな勉強をさせてい



心不全などの発症メカニズムの解明、循環作動性ペプチドとその受容体システムの病態生理学的意義の解明、および血管の再生医学研究などに取り組んでいます。

昨年度からは、内閣府の最先端・次世代研究開発支援プログラムに採択していただき、「新しい血管統合機構に基づく、慢性臓器障害治療薬の開

で、いったん進行すると治療が難しくなります。各臓器が正常に機能する上で血管は中心的な役割を果たしています

理活性ペプチドに注目しました。私たちは、AMが血管の恒常性を維持する上で重要な働きをして

AMの機能を制御していることを突き止めた。現在は、AMやRAPの遺伝子を人工的に改変したマウスな

る新しい治療法に繋がっていると考えています。

私たちの研究室は、遺伝子操作マウスの樹立と解析を中心に行なっていることもあり、平成21年にお台場の日本科

繋がりました。WHHLラビットは樹立に7年を要したのに対し、マウス

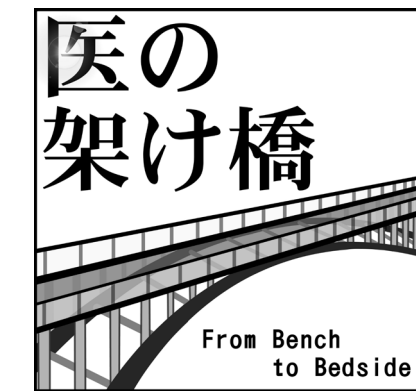
ウスの疾患研究の多くの分野で必要とされていますが、樹立までに時間と労力がかかるという難点

の科学・技術対話「サイエンスコミュニケーション活動にも大変精力的に取り組まれており、

私は、38歳という、医学部教授としてはおそろしく最年少で新しい講座の立ち上げをするという経験

頂き、大変勇気づけられながら今日まで参りました。

松本市は、「文化香るアルプスの城下町」や「三ガク都(楽都、岳都、学都)」のキャッチフレーズにもあるように、安曇野の豊かな自然や、国宝松本城、上高地の絶景などをはじめ、見所の多い町です。小澤征爾ら一流音楽家の集う音楽祭であるサイトウキネンフェスティバルも、毎年夏に開催されています。昨年は、NHK連続テレビ小説「おひさま」や映画「神様のカルテ」、「岳



る例として、遺伝性高脂血症ウサギ(WHHLラビット)(Watanabe heritable hyperlipidemic rabbit)は、その後のコレステロール代謝経路の発見や、コレステロール降下薬スタチンの開発に

たいと考えています。日本科学未来館は、宇宙飛行士である毛利衛氏が館長を務め、最先端科学の成果を広くデモンストラレーションする場となっています。毛利館長は、研究者と一般社会と

は、今後ともご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

同窓会の皆様がたには、今後ともご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。